



公益社団法人

日本語教育学会

2018 年度第 5 回支部集会【東北支部】開催報告

主催：公益社団法人日本語教育学会・盛岡大学言語教育研究委員会（MODIL）

開催日：2018 年 12 月 1 日（土）

会場：盛岡大学 D 校舎（D102 講義室）

参加者：26 名（会員 17 名・一般 9 名）

東北支部では、今年度の支部集会を盛岡大学言語教育研究委員会（MODIL）と共催で開催しました。研究発表への応募がなかったため、パネルディスカッションとワークショップで構成しました。

現在、外国人材の受け入れ拡大が国会でも審議されるなど、日本語教育を取り巻く状況

は大きく変化しています。そこで、「これから求められる日本語教育人材とその養成」というパネルディスカッションを設けることにしました。神吉氏には「外国人受け入れの政策の現状と課題」、増田氏には「文化庁の日本語教育人材の養成・研修の在り方の改定の背景とポイント」をお話いただきました。これらを踏まえたうえで、東北支部の生活者、留学生、児童生徒等を対象とした日本語教育人材育成の場ではどのような対応が必要になるのか、その課題や疑問について 3 名の方に現状報告をお願いしました。東北支部では生活者や児童生徒支援などはボランティアベースでの対応が中心です。こうした場に日本語教師がどのように関わられるのか、日本語教師ができることは何かなど、これからの日本社会の変化と求められる日本語教育人材について考えるきっかけとなりました。

文化庁の報告書には、日本語教育人材に求められる資質・能力として「知識・技能・態度」が挙げられています。そこで、これとリンクする「わかる・できる・つながる」という外国語教育の環境をデザインするための新たな参照枠組みである「外国語学習のめやす」のワークショップを行いました。澤邊氏からまず「外国語学習のめやす」のポイントをお話いただいた後で、グループで授業デザインの方法の考え方や日本語教員養成を参照した教育プログラムの実施の可能性や課題について検討しました。各自が行っているプロジェクト型の学習を「外国語学習のめやす」に当てはめて、新しい視点で授業づくりを考えるきっかけになったようです。

参加者からは「社会につながる力を育てる、つながることの大切さを改めて感じました。」「来てよかったというより来なかったと思うとおそろしい。」「専門家から詳しい話が聞けて非常に参考になった」という意見が寄せられ、今回のテーマへの関心の高さがうかがえました。

東北支部では、地方の会員が研究発表できる場を年 1 回提供していきたいと考えています。秋の大会の翌週という日程であることも影響してか、研究発表への応募が残念ながら 1 件もありませんでしたが、来年度は応募者が増えるように呼びかけていきたいと思っています。参加者からは「東北ならではの実践をもっと聞きたい」「参加した知らない人同士が繋がれる仕組みを作ってほしい」という意見がありました。今後は、こうした意見も踏まえ、より地域に密着したテーマで、参加者同士が繋がる場を提供していきたいと考えています。

最後になりましたが、この度の支部集会の開催に際してご協力くださった盛岡大学および運営に携わっていただいた関係者のみなさま、ワークショップ及びパネルディスカッションにご協力くださったみなさま、参加者のみなさまに心よりお礼申し上げます。

（報告者：支部活動委員 小河原義朗・中川祐治・高橋亜紀子）



パネルディスカッションの様子